

社会科世界地誌学習のカリキュラムデザインに関する研修ニーズ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-02-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 長倉, 守 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00024683

社会科世界地誌学習のカリキュラムデザインに関する研修ニーズ

長倉 守*

In-School Training Needs on Curriculum Design in Social Studies World Topography

Mamoru NAGAKURA

キーワード カリキュラムデザイン 世界地誌学習 研修ニーズ

1 はじめに

本研究の目的は、世界地誌学習のカリキュラムデザイン力の向上に向け、社会科教師の相談・助言に関する研修ニーズの特性について明らかにすることである。

現行の中学校社会科学学習指導要領（以下、平成 20 年版とする）の世界地誌学習では、およそ 20 年ぶりに世界全州を対象とした授業実践を求めている。しかも、平成 20 年版において提示された習得－活用－探究の学習過程を踏まえ、中核となる主題の問題解決に向けた学習プロセスに着目して世界各州のカリキュラムを構想することが期待されている。またこれは同時に、世界地誌学習独自の課題として指摘されてきた網羅的・羅列的な学習の克服を志向し、主題の設定にもとづく高度な授業実践の希求でもある。

しかしながら、平成 20 年版が求めるカリキュラムデザインの組織化は簡単なことではない。竹内(2012)は、教師には従前以上に広く深い地域理解と高度な授業構成能力が求められ、何より生徒が中核的な主題を自らの問題として捉えることができなければそのような学習過程は成立しないと論じている。

このような世界地誌学習に関して、学術レベルにおいてこれまでも様々な議論が展開されてきた。山口(2008)による地誌学・地誌学習の理論を踏まえ動態地誌的方法を用いた授業設計の提案、田部(2013)による研究者と実践者の協同により世界各州における基礎的な素材や考え方、具体的な方法論に関する議論、荒井(2013)による具体的な授業構成における社会的有用性の視点の必要性に関する指摘、池(2013)による地誌学習の内容構成の再検討をはじめ今後の課題の提示などが挙げられる。また、向後(2011)、新堀(2012)のように、個々の教師による単元レベルのカリキュラムデザインの事例として現場教師に示唆を与える研究も見られる。

また近年、地誌学習をテーマに、地理学研究者、地理教育研究者、現場実践者の交流の機会が設定されてきた。こうした機会では、地理学研究者、地理教育学研究者、学校現場の実践者による議論が展開されるとともに相互の立場を越えた検討の重要性が確認されている¹⁾。

しかし、こうした議論では、具体的なカリキュラムデザインへの展開を視野に入れつつも、授業実践の現状把握やその後の実践の変容については、実践者に委ねられ十分な検証が行われていないといった課題を指摘することができる。たしかに、地誌学、地理教育学といった学問の視点からの議論は重要であり、実践のヒントとして示唆に富む。しかし一方で、実践者にとっては、ヒントから具体的なカリキュラムに落とし込む翻案が困難なのである。実際に教師が置かれた文脈を踏まえ、理念の具現化を試みようとする教師の経験の内実に一層迫る研究や助言が求められているといえよう。

そこで長倉(2015)では、社会科教師の世界地誌学習に関するカリキュラムデザインの状況について把握するため、教師の経験に埋め込まれたカリキュラムデザインの形成過程に着目し、高い授業実践力を有する 10 人の実践家に対するインタビュー調査を実施し、質的分析を行った。その結果、世界地誌学習の単元レベルにおけるカリキュラムデザインのプロセスや実践的知識に関する構造を提示した。

また長倉(2017)では、従前の議論では踏み込めていなかった、研究者(外部支援者)と実践家(社会科教師)との協働的な省察によるアクション・リサーチを行い、世界地誌学習に関する授業実践の支援や教師の変容について検討を行った。その結果、外部支援者が地理教育学・地理学の研究成果をそのまま教師に助言を行っても、教師がそれを理解することは困難であることが明らかになった。またそれゆえ、外部支援者と教師による協働的な省察の中で、教師が求める相談や助言に関する研修ニーズを外部支援者がまずは掘り起こし、それに適応するように学術的成果を翻案し教師に埋め込まなければ、真に教師に届く助言にはなりえず、授業実践の変容やその自覚化には繋がらないことを示すことができた。

これにより、世界地誌学習のカリキュラムデザインの実践にあたり、教師が求める相談や助言に関する研修ニーズの把握が重要な課題として浮き彫りとなった。先行研究においては、こうした研修ニーズについて実証的に把握した研究は管見の限り見当たらない。

表 1 世界地誌学習の研修ニーズ 質問項目

質問紙調査項目	項目概要
求める相談・助言内容	世界地誌学習「世界の諸地域」のねらい、考え方
	地域的特色の把握
	世界各州に関する資料収集
	世界各州の学習における主題
	主題をもとにした単元構想
	一時間の授業構想
	地図や景観写真、統計資料等の活用
	各自の疑問や課題
求める相談・助言者	世界各州の地理に関する大学研究者
	世界地誌学習の授業づくりに関する大学研究者
	世界地誌学習の授業づくりに関する研究者かつ実践家である中学校教員
	県や市町の指導主事
	教科リーダー等
	近隣の中学校教員
	校内の教員
求める相談・助言機会	サークル等の教員
	校外研修における講義
	校外研修における授業づくり演習
	校外研修における実践報告
	研究授業(他者)の事前検討会や事後検討会
	研究授業(自己)の事前検討会や事後検討会
	日常授業(他者)の事前検討会や事後検討会
	日常授業(自己)の事前検討会や事後検討会
サークル等自主的研修会	

いずれも4件法で回答を求めた。

表2 質問紙調査回答者の属性・経験等

		全体	
		n	%
職名	教諭・講師	329	91.9
	教頭・主幹教諭等	29	8.1
年齢	20代	81	22.6
	30代	78	21.7
	40代	85	23.7
	50代	115	32.0
在職年数	10年未満	140	39.1
	10年以上20年未満	46	12.9
	20年以上	172	48.0
出身学部	地理系学科・専攻	36	10.1
	その他	320	89.9
日常省察機会	ない・あまりない	126	35.3
	時々ある・よくある	231	64.7
世界地誌学習指導経験	ない	39	11.1
	1回以上	312	88.9
世界地誌学習研究授業経験	ない	238	67.4
	1回以上	115	32.6

そこで本稿では、世界地誌学習のカリキュラムデザイン力の向上に関する議論に向け、社会科教師の相談や助言に関する研修ニーズの特性について明らかにする。どんな研修ニーズがあるのか統計的な処理により実証的に明らかにする。具体的には、社会科教師の研修ニーズに関する質問項目(表1)について、①全体の回答傾向と②属性・経験等別の分析を行うこととする。

2 調査の概要

まず、調査の対象や時期等の概要について説明する。2015年3月にS県の全ての公立中学校264校の社会科教師を対象として質問紙調査を行った。調査用紙については、各中学校に、学級数に応じて5学級あたり1人分の調査用紙を郵送し²、配布及び返送を各中学校に依頼した。有効回答数は360であり、回答率は59.3%であった。

次に調査内容について説明する。表1は、質問項目を示している。世界地誌学習のカリキュラムデザインにつ

表3 各項目の平均値

いて、どんな内容を相談・助言してみたいか(求める相談・助言内容)、どんな人に相談・助言してみたいか(求める相談・助言者)、どんな機会に相談・助言してみたいか(求める相談・助言機会)の3つについて質問した。

表2は、調査対象となった回答者に関する属性等を示している。以下ではこうした回答者の傾向について説明する。まず職名については、全体の9割以上(91.9%)が教諭及び講師、残りが教頭及び主幹教諭、教務主任であった。次に年齢については、50代が最も多く(32.0%)、次いで40代(23.7%)、20代(22.6%)、30代(21.7%)の順であった³。また、在職年数については、20年以上の経験者が5割弱(48.0%)を占め、次いで10年未満(39.1%)、10年以上20年未満(12.9%)の順となっている。また大学における出身学部については、地理系学科・専攻(教員養成学部地理学研究室を含む)が約1割(10.1%)、その他が約9割(89.9%)であった。

今回の調査では、教師の置かれた状況や研修に関する状況を把握するため、日常の授業実践に関する省察機会表4 在職年数、出身学部による比較

		全体	
		平均値	
相談・助言内容	主題学習ねらい・考え方	3.30	
	地域的特色把握	3.30	
	資料収集・探索	3.24	
	主題設定	3.30	
	主題学習単元構想	3.34	
	一時間授業構想	3.12	
	資料活用	3.24	
	各自課題	3.16	
	相談・助言者	地理学大学教員	2.79
		地理教育大学教員	3.08
実践的研究中学教員		3.62	
指導主事		2.96	
教科リーダー		3.04	
近隣校教員		3.17	
校内教員		3.13	
サークル等教員	2.79		
相談・助言機会	講義	3.11	
	授業づくり演習	3.30	
	実践報告	3.22	
	研究授業（他者）	3.29	
	研究授業（自己）	3.16	
	日常授業（他者）	3.16	
	日常授業（自己）	3.10	
サークル等	2.64		

注) 数値は4段階評価の平均値を示す。

		在職年数				出身学部						
		10年未満		10年以上		地理系		その他				
		平均値	p	平均値	n	平均値	p	平均値	n			
相談・助言内容	主題学習ねらい・考え方	3.47	>***	3.18	140	217	3.17	<	3.31	36	320	
	地域的特色把握	3.44	>**	3.22	140	217	3.17	<	3.32	36	320	
	資料収集・探索	3.46	>***	3.10	140	217	2.97	<*	3.27	36	320	
	主題設定	3.45	>**	3.20	140	217	3.22	<	3.31	36	320	
	主題学習単元構想	3.54	>***	3.22	139	217	3.28	<	3.35	36	319	
	一時間授業構想	3.39	>***	2.95	140	216	3.11	<	3.12	36	319	
	資料活用	3.41	>***	3.12	140	217	3.14	<	3.24	36	320	
	各自課題	3.33	>***	3.06	140	217	3.08	<	3.17	36	320	
	相談・助言者	地理学大学教員	2.93	>*	2.70	140	217	2.42	<*	2.83	36	320
		地理教育大学教員	3.26	>**	2.97	140	217	2.61	<***	3.14	36	320
実践的研究中学教員		3.77	>***	3.52	140	215	3.42	<	3.65	36	318	
指導主事		3.24	>***	2.77	140	216	2.94	<	2.96	36	319	
教科リーダー		3.26	>***	2.90	140	217	2.97	<	3.06	36	320	
近隣校教員		3.42	>***	3.01	140	216	3.17	<	3.17	36	319	
校内教員		3.45	>***	2.93	140	214	3.11	<	3.14	35	318	
サークル等教員	2.87	>	2.74	139	215	2.61	<	2.81	36	316		
相談・助言機会	講義	3.28	>**	3.00	140	216	2.83	<*	3.13	36	319	
	授業づくり演習	3.51	>***	3.18	140	216	3.09	<	3.33	35	320	
	実践報告	3.32	>	3.16	140	217	2.89	<	3.26	36	320	
	研究授業（他者）	3.40	>*	3.23	140	217	3.03	<*	3.33	36	320	
	研究授業（自己）	3.27	>*	3.09	140	217	2.97	<	3.18	36	320	
	日常授業（他者）	3.39	>***	3.01	140	217	2.94	<	3.18	36	320	
	日常授業（自己）	3.28	>***	2.99	140	217	3.00	<	3.12	36	320	
サークル等	2.72	>	2.59	137	216	2.50	<	2.66	36	315		

* p<0.05,** p<0.01,*** p<0.001

や世界地誌学習の指導経験、研究授業の経験の有無についても質問した。このうち、日常省察機会については、全体の3分の2弱(64.7%)が「時々ある」・「ある」と回答し、「ない」・「あまりない」(35.3%)を上回っている。さらに平成20年版の世界地誌学習の指導経験については、「ない」が1割程度(11.1%)、「1回以上」が9割程度(88.9%)であった4。また研究授業経験については、「ない」が3分の2以上(67.5%)を占め、1回以上(32.5%)を上回っていた。

3 結果

3.1 全体の回答傾向

まず、世界地誌学習のカリキュラムデザインに関し、求める「相談・助言内容」、「相談・助言者」、「相談・助言機会」といった、社会科教師の研修ニーズについて尋ねる問いを各8項目提示し、「聞いてみたい」(4点)から「聞いてみたくない」(1点)までの4段階で回答を求めた。以下ではその結果を確認する。

表3から各項目の平均値を確認する。まず「相談・助言内容」において平均値が高い項目は、「主題学習単元構想」(3.34)、「主題学習ねらい・考え方」(3.30)、「主題設定」(3.30)、「地域的特色把握」(3.30)などであった。

「相談・助言内容」については全ての項目で平均値が3を超えており、中でも主題学習の基本的原理や学習対象となる地域的特色の把握を含めた具体的な単元レベルのカリキュラムデザインについて相談・助言を求めていることが明らかとなった。このような結果は、主題を設定して行う世界地誌学習のカリキュラムデザインの困難性を示しているものと考えられよう。

次に、「相談・助言者」に関する研修ニーズでは、「実

践的研究中学教員」の平均値(3.62)が突出して高く、「近隣校教員」(3.17)、「校内教員」(3.13)、「地理教育大学教員」(3.08)の順に平均値の高い項目が続いた。一方、平均値が相対的に低い項目は「地理学大学教員」(2.79)、「サークル等教員」(2.79)、「指導主事」(2.96)であった。求める相談・助言者としては、地理教育研究に関わる実践者や身近にいる社会科教員を求めている傾向があることが示唆された。

また、「相談・助言機会」に関する研修ニーズでは、平均値の高い項目として、「授業づくり演習」(3.30)、「研究授業(他者)」(3.29)、「実践報告」(3.22)、「研究授業(自己)」(3.16)、「日常授業(他者)」(3.16)の順であった。ただし「サークル等」(2.64)を除き、いずれの項目も平均値が3を超えており、多様な相談・助言機会を求めていることが明らかとなった。

3.2 属性・経験別による比較

次に、属性別に平均値を確認しよう。まず、表4から「在職年数」の相違により比較する。「在職年数」をみると、在職年数が10年未満である比較的年数が短い教師の平均値が、10年以上の比較的年数が高い教師に比べて有意に高い。「相談・助言内容」の全ての項目をはじめとして、「相談・助言者」では8項目中7項目、「相談・助言機会」では6項目で有意に高くなっている。このことから、在職年数が比較的短い教師が、相談・助言を多く求めていることが分かる。

次に「出身学部」の相違により比較すると、地理系学科・専攻以外のその他の学部の出身の方が、5項目で有意に平均値が高かった。特に、「相談・助言者」の「地理教育大学教員」については、0.1%水準で有意に高かつ

表5 世界地誌学習指導経験、日常省察機会による比較

	指導経験				日常省察機会					
	無		有		無		有			
	平均値 <> p	平均値	n	n	平均値 <> p	平均値	n	n		
相談・助言内容	主理学習ねらい・考え方	3.38	3.29	39	312	3.34	3.27	126	230	
	地域的特色把握	3.46	3.28	39	312	3.31	3.29	126	230	
	資料収集・探索	3.26	3.25	39	312	3.37 > *	3.16	126	230	
	主題設定	3.46	3.29	39	312	3.31	3.29	126	230	
	主題学習単元構想	3.44	3.33	39	311	3.38	3.32	125	230	
	一時間授業構想	3.23	3.11	39	311	3.11	3.12	125	230	
	資料活用	3.31	3.23	39	312	3.23	3.24	126	230	
	各自課題	3.38 > *	3.13	39	312	3.17	3.16	126	230	
	相談・助言者	地理学大学教員	2.95	2.75	39	312	2.84	2.76	126	230
		地理教育大学教員	3.21	3.06	39	312	3.10	3.07	126	230
実践的研究中学教員		3.72	3.60	39	310	3.65	3.59	126	228	
指導主事		3.18	2.93	39	311	2.90	2.98	125	230	
教科リーダー		3.26	3.02	39	312	2.98	3.08	126	230	
近隣校教員		3.36	3.15	39	311	3.14	3.19	125	230	
校内教員		3.33	3.11	39	309	3.09	3.16	126	227	
相談・助言機会	サークル等教員	2.85	2.79	39	308	2.70	2.84	125	227	
	講義	3.13	3.11	39	312	3.10	3.11	125	230	
	授業づくり演習	3.28	3.31	39	311	3.31	3.30	126	229	
	実践報告	3.03	3.24	39	312	3.28	3.19	126	230	
	研究授業(他者)	3.51 > *	3.27	39	312	3.27	3.30	126	230	
	研究授業(自己)	3.38	3.13	39	312	3.10	3.19	126	230	
	日常授業(他者)	3.46 > **	3.12	39	312	3.13	3.17	126	230	
日常授業(自己)	3.44 > **	3.06	39	312	3.07	3.11	126	230		
サークル等	2.63	2.65	38	308	2.56	2.68	125	226		

* p<0.05,** p<0.01,*** p<0.001

表6 研修経験(研究授業、校外研修、教科リーダー等)による比較

	研究授業経験				校外研修参加経験				教科リーダー等経験					
	無		有		無		有		無		有			
	平均値 <> p	平均値	n	n	平均値 <> p	平均値	n	n	平均値 <> p	平均値	n	n		
相談・助言内容	主理学習ねらい・考え方	3.31	3.26	238	115	3.24	3.33	140	209	3.36	3.20	219	138	
	地域的特色把握	3.29	3.34	238	115	3.24	3.32	140	209	3.33	3.27	219	138	
	資料収集・探索	3.24	3.25	238	115	3.26	3.22	140	209	3.30 > *	3.14	219	138	
	主題設定	3.30	3.27	238	115	3.34	3.24	140	209	3.33	3.23	219	138	
	主題学習単元構想	3.34	3.34	237	115	3.35	3.32	139	209	3.38	3.28	218	138	
	一時間授業構想	3.14	3.07	237	115	3.15	3.09	140	208	3.22 > **	2.96	218	138	
	資料活用	3.23	3.26	238	115	3.22	3.25	140	209	3.32 > **	3.11	219	138	
	各自課題	3.13	3.23	238	115	3.14	3.18	140	209	3.24 > **	3.04	219	138	
	相談・助言者	地理学大学教員	2.82	2.75	238	115	2.79	2.78	140	209	2.83	2.72	219	138
		地理教育大学教員	3.12	3.01	238	115	3.11	3.05	140	209	3.13	3.01	219	138
実践的研究中学教員		3.63	3.59	237	114	3.57	3.63	139	208	3.62	3.62	218	138	
指導主事		2.93	2.98	237	115	3.01	2.89	140	209	3.04 > *	2.83	219	138	
教科リーダー		3.02	3.10	238	115	3.07	3.01	140	209	3.05	3.03	219	138	
近隣校教員		3.16	3.21	237	115	3.19	3.15	140	209	3.23	3.07	219	137	
校内教員		3.13	3.15	238	112	3.19	3.09	140	206	3.25 > ***	2.96	219	136	
サークル等教員	2.82	2.75	234	115	2.72	2.82	136	209	2.75	2.85	216	137		
相談・助言機会	講義	3.10	3.13	237	115	3.11	3.10	140	208	3.16	3.03	218	138	
	授業づくり演習	3.29	3.33	237	115	3.27	3.32	139	209	3.33	3.27	219	137	
	実践報告	3.20	3.28	238	115	3.15	3.27	140	209	3.23	3.20	219	138	
	研究授業(他者)	3.27	3.33	238	115	3.26	3.30	140	209	3.30	3.29	219	138	
	研究授業(自己)	3.13	3.23	238	115	3.09	3.22	140	209	3.18	3.13	219	138	
	日常授業(他者)	3.16	3.17	238	115	3.14	3.17	140	209	3.20	3.11	219	138	
	日常授業(自己)	3.11	3.10	238	115	3.04	3.15	140	209	3.11	3.09	219	138	
サークル等	2.63	2.64	233	115	2.56	2.70	136	208	2.63	2.66	215	137		

* p<0.05,** p<0.01,*** p<0.001

た。これは、地理学学科・専攻の出身者と比較し、その他の学部出身者における地理教育大学教員との接点の希少性が背景にあるのではないかと推察される。

続いて、表5から「指導経験」と「日常省察機会」の有無による比較を行う。まず、「指導経験」をみると、4項目において指導経験がない教師の方が、有意に平均値が高かった。中でも「相談・助言機会」に着目すると、研究授業や日常授業など授業に関する機会が高く、まずは他者の授業観察や日常の自己の授業への関わりを求めていることが分かる。

また「日常省察機会」をみると、「相談・助言内容」の「資料収集・探索」のみに平均値に有意な差がみられ、

それ以外では有意な差はなかった。学び続ける教員像が提示され、省察の重要性が指摘されているが、研修ニーズとの関係性は確認できなかった。

次に、表6から「研修経験」による比較を行う。まず注目すべきは、相談・助言に関する研修ニーズの平均値に関して、「研究授業経験」及び「校外研修参加経験」の有無では有意な差はみられなかったということである。その一方で、「教科リーダー等経験」では「相談・助言内容」の4項目と「相談・助言者」の2項目の計6項目で、「無」の方が、有意に平均値が高かった。「研究授業経験」、「校外研修参加経験」、「教科リーダー等経験」のそれぞれの「有」と「無」の平均値の比較では、「教科リーダー

表7 属性・経験別による比較

	全体 平均値	出身学部		在職年数		指導経験		省察		研修経験		
		他	地理	未満	10年	以上	無	有	無	有	研究経験	
											研究授業	校外研修
相談・助言内容	主題学習ねらい・考え方	3.30		>								
	地域的特色把握	3.30		>								
	資料収集・探索	3.24	<	>			>					>
	主題設定	3.30		>								
	主題学習単元構想	3.34		>								
	一時間授業構想	3.12		>								>
	資料活用	3.24		>								>
	各自課題	3.16		>								>
相談・助言者	地理学大学教員	2.79	<	>								
	地理教育大学教員	3.08	<	>								
	実践的研究中学教員	3.62		>								
	指導主事	2.96		>								>
	教科リーダー	3.04		>								
	近隣校教員	3.17		>								
	校内教員	3.13		>								>
サークル等教員	2.79		>									
相談・助言機会	講義	3.11	<	>								
	授業づくり演習	3.30		>								
	実践報告	3.22		>								
	研究授業（他者）	3.29	<	>								
	研究授業（自己）	3.16		>								
	日常授業（他者）	3.16		>								
日常授業（自己）	3.10		>									
サークル等	2.64		>									

注) 符号 (<>) は5%水準で有意な差を示す。

等経験」の「有」が平均値の低い項目が多く、「教科リーダー等経験」の「無」が平均値の高い項目が多い。よって、このことが有意差に影響していると考えられる。

「教科リーダー等経験」において有意な差があった項目は、「相談・助言内容」では「資料収集・探索」、「一時間授業構想」、「資料活用」等であり、主題との関わりや単元レベルに関するカリキュラムデザインといった俯瞰的な視点が求められる事項ではなく、一時間のカリキュラムデザインに関する授業実践の基本的な事項に関するものであった。

4 考察

これまでの分析結果を総括したものが、表7である。

まず、全体の回答傾向に着目し、あらためて平均値に高い質問項目について言及する。求める「相談・助言内容」では、「主題学習単元構想」(3.34)、「主題学習ねらい・考え方」(3.30)、「主題設定」(3.30)、「地域的特色把握」(3.30)が高い。また、求める「相談・助言者」では、「実践的研究中学教員」の平均値(3.62)が突出して高く、「近隣校教員」(3.17)、「校内教員」(3.13)と続いていた。また、求める「相談・助言機会」としては、「授業づくり演習」(3.30)、「研究授業(他者)」(3.29)、「実践報告」(3.22)が高い。

次に、研修ニーズに関して有意差が生じる属性や経験等については、「在職年数」が21項目と最も多い。次いで、「教科リーダー等経験」が6項目となっている。相談・助言に関する研修ニーズについては、主として10年未満の教師との関係性を指摘できよう。

その上で、「相談・助言内容」について注目し、表を横

に見ると、「資料収集・探索」では、出身学部、在職年数、省察、リーダーの4項目、「一時間授業構想」、「各自課題」では2項目において有意差が生じている。また、「相談・助言者」について着目すれば「指導主事」、「近隣校教員」などが2項目で有意差が生じている。さらに「相談・助言機会」では、「講義」や「研究授業(他者)」が2項目で有意差が生じている。

以上の点から、世界地誌学習に関する社会科教師の研修ニーズについて、次の2点が重要な知見として示される。

第1の知見としてまず確認されたことは、世界地誌学習において求められている主題学習に関して、理論を背景にしつつも実践的かつ具体的な支援を社会科教師が求めているということである。

上述のとおり、「相談・助言内容」については、「主題学習単元構想」や「主題設定」、「主題学習ねらい・考え方」等の主題学習のカリキュラムデザインに関する項目について平均値が高い傾向がみられた。先行研究においては、牛込(2011)、中山(2014)、中條ら(2013)が、主題をもとに学習を展開させる世界地誌学習の授業実践の困難性を指摘している。本研究の結果は、こうした議論の結果を実証的に裏付けたものとして位置付けることができよう。すなわち、社会科教師は、主題との関わりの中でいかにカリキュラムデザインを展開させていくのかについて、研修ニーズがあることが明確になった。

また、「相談・助言者」では、「実践的研究中学教員」が最も平均値が高く、全回答者の4分の3の教師が「実践的研究中学教員」を求めていることが示された。これは同じ中学教師である「教科リーダー」、「近隣校教員」、

「校内教員」、「指導主事」よりも平均値が高い。またこれは、研究者である「地理学大学教員」、「地理教育大学教員」よりも高い。

こうした回答傾向については、「実践的研究中学教員」が、世界地誌学習に関する実践的研究を行いつつも、中学教師ということから、実際に世界地誌学習に関する授業を行うとともに社会科教師の置かれた様々な実践文脈を理解している人物として、回答者に評価されたものとして推察される。いわば、回答者である社会科教師は、自身の現状の打破には、単なる授業経験に基づいた情報交換ではなく、実践的研究と授業実践の両方の視点が必要であると認識しており、そうした機能を「実践的研究中学教員」に求め、理論と実践の架橋にもとづく助言を期待していると考えられよう。

他方、「相談・助言機会」については、「授業づくり演習」、「研究授業（他者）」、「実践報告」の順に平均値が高い。単なる「講義」や自身の研究授業や日常授業に対する助言ではなく、まずは主題学習の基本的な理念等について、演習や他者の授業の参観や報告から具体的に理解したいといった研修ニーズが浮かび上がった。

続く第2の知見として確認されたことは、研修ニーズと属性・経験等との関係性についてである。研修ニーズについては、特に在職年数との関係性が高く、在職年数が短い教師が長い教師よりも平均値が有意に高い項目が多かった。特に、「相談・助言内容」については、全ての項目において平均値が有意に高かった。在職年数の短いいわゆる若手教員については、世界地誌学習の学習経験がないことへの危惧が指摘されているが、学習経験がないからといって研修ニーズが低いという訳ではなく、むしろ相談・助言ニーズが高く、向上心を持っていることが明らかとなった。前項で示した結果を踏まえ、こうしたニーズに対してアプローチを行うことにより、学び続ける教師を支援していくことが求められよう。

他方、比較的在職年数の長い教師の授業実態については、20年前の詰め込みに戻ったという意識から、どれだけ効率的に多くを詰め込むかに追われているとの言及もある。こうした状況については、現行の学習指導要領の理念とは矛盾している。しかしながら、在職年数の長い教師の研修ニーズは、若手教師に比べて平均値が低い。よって、在職年数の長い教師に対して、現行学習指導要領の理念に基づくカリキュラムデザインに向け、どのようにアプローチしていくかが課題となる。

一方、教科リーダー経験の有無に着目するならば、有意差が確認された項目として、「相談・助言内容」では、「資料収集・探索」、「一時間授業構想」、「資料活用」等があった。これらの項目は、単元レベルのカリキュラムデザインに関する項目ではなく、一時間の授業レベルに関するカリキュラムデザインに類する項目である。つまり、教科リーダー経験の無い教師にとっては、一時間の授業レベルに関するカリキュラムデザインについて課題と

なっている。よって、教科リーダー経験の無い教師に対してアプローチを行う際には、単元レベルのカリキュラムデザインだけでなく、資料収集等の教材研究を含みつつ、日々の授業レベルのカリキュラムデザインに還元できるよう配慮する必要がある。これとは逆に、教科リーダー経験のある教師にとっては、一時間の授業レベルに関する課題はクリアできているものと考えられる。こうしたデータからも、教科リーダー経験のある教師のカリキュラムデザイン力の高さが窺える。

他方、「在職年数」では有意差が認められ、「教科リーダー経験」では有意差が認められなかった項目として、「相談・助言内容」では、「主題学習ねらい・考え方」、「主題設定」、「主題学習単元構想」といった主題学習のカリキュラムデザインに関する項目が挙げられる。すなわち、教科リーダー経験者については、公開研究授業や地域内の他の教師への指導・助言を通じ、現行学習指導要領の世界地誌学習の特性である主題設定に関する研修ニーズが高まるということである。教科リーダーは、比較的在職年数の長い授業実践力の高い教師が経験している。その教科リーダーが、あらためて現行世界地誌学習の特性に気付き、カリキュラムデザインに葛藤し、模索する中で支援を求めている様相が伺える。主題設定によるカリキュラムデザインの困難性が浮き彫りになる。また、教科リーダー経験の有無では、「相談・助言者」、「相談・助言機会」の多くで有意差が生じていない。これは、「在職経験」の長短による結果とは対照的である。学び続ける教員の育成や研修機会の設定の検討にあたり、教科リーダー制度の有効性が示唆される。

5 おわりに

本研究では、世界地誌学習のカリキュラムデザイン力の向上に向け、社会科教師の相談・助言に関する研修ニーズの特性について明らかにした。研修ニーズの特性として、主として、主題設定に関する内容について授業実践との関わりから具体的かつ実践的な支援を、理論も実践も把握する者から、講義よりも演習や研究授業において、といった研修ニーズが浮き彫りになった。また、在職年数の短い若手教員の研修ニーズが高いことが明らかになった。一方、在職年数の比較的長い教師についても授業実践に課題を抱えているとの指摘もあり、研修ニーズが若手教員と比較して高くないこうした層に、どのようにアプローチしていくかが問われている。

また、教科リーダー経験の無い教員については、単元レベルのカリキュラムデザインだけでなく、一時間の授業レベルのカリキュラムデザインに対する支援ニーズがあることも明らかになった。一方、比較的在職年数の長い授業実践力の高い教師が経験している「教科リーダー経験」については、「在職年数」の長短ほど有意差がなかった。特に主題学習のカリキュラムデザインに関する内容を中心に、研修ニーズが高いことが明らかになった。

研修ニーズに関する分析からも、主題学習のカリキュラムデザインに葛藤を抱え、模索している状況が浮き彫りになった。あらためて現行の世界地誌学習が高度な授業実践を求めていることが確認されたといえよう。社会科教師の支援にあたっては、こうした研修ニーズを理解して臨むことが求められよう。

本研究で得られた知見については、いずれもこれまでの先行研究において指摘されてこなかったことであり、本研究の調査によって明らかになったことであると論じることができる。ただし、これらの知見については、S 県の社会科教師に対する限定的な質問項目から得られた知見であることの限界を真摯に受け止めなければならない。特に、属性・経験等との関係性に関する分析については、本調査で問わなかった属性・経験等とも当然ながら関連がある可能性があり、さらなる質的調査や量的調査が求められよう。

注

¹ 例えば日本地理学会の地理教育シンポジウムでは、平成 20 年版に呼応して地誌学習に関する様々な議論・検討を重ねている。2010 年春季大会では「地理学習論の再構築—地誌学習論、主題学習論、巡検学習論」が、2013 年春季大会では「地誌学と地誌教育(諸地域学習)」が、2014 年秋季大会では「学校における地誌学習の現状・課題・展望」の各シンポジウムが開催されている。志村喬・吉水裕也・伊藤直之(2014)、学校における地誌学習の現状・課題・展望、日本地理学会発表要旨集、p.156

² 社会科教師 1 人が担当する学級数は 5 学級程度であるためこのように郵送した。

³ 参考までに 2014 年度の S 県公立中学校の年齢構成については、50 代が 42.3%、40 代が 22.9%、30 代が 19.8%、20 代が 15.0% である。このうち 50 代については管理職登用者を含んでいるが、本調査における 50 代のサンプル数の多さは、こうした年齢構成を反映していると考えられる。なお、表 5-3 の%については、欠損値を削除して計算した値を示した。

⁴ 平成 20 年版の中学校学習指導要領については、平成 24 年度(2012 年度)から完全実施となっている。

参考文献

- 山口幸男編(2008)、動態地誌的方法によるニュー中学地理授業の展開、明治図書、126p..
- 田部俊光(2013)、「世界の教え方」シリーズの経緯と今後の方向性、新地理、61(1)、pp.2-5.
- 荒井正剛(2013)、中学校における「世界の諸地域」学習のあり方—地域から学ぶ地誌学習—、新地理、61(1)、pp.18-26.
- 池俊介(2013)、世界地誌学習の今後の課題、新地理、61(1)、pp.42-43.

向後武(2011)、第 5 回アメリカー地域区分する楽しさ—、地理、56(12)、古今書院、pp.98-103.

新堀毅(2012)、第 7 回アフリカーアフリカをポジティブにとらえる—、57(4)、古今書院、pp.82-87.

長倉守(2015)、中学校「世界の諸地域」学習における授業設計の模索—社会科教師へのインタビュー調査をもとにした質的研究—、新地理、63(2)、pp.1~15.

長倉守(2017)、静岡大学教育実践総合センター紀要、26、pp.147~156.

牛込裕樹(2011)、中学校新学習指導要領と地誌学習論、E-journal GEO、Vol.6(1)、pp.94-95.

久山将弘(2014)、中学校における地誌学習の現状・課題、E-journal GEO、Vol.9(2)、pp.219-220.

中條曉仁・岩本知之・早馬忠広(2013)、中学校社会科における動態地誌的学習の特質と課題—「日本の諸地域」を中心として—、静岡大学教育学部研究報告教科教育学篇、45、pp.71-81.